

2012 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 14:50~15:50 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(40点)

「自己とは何か」という問いに、近代哲学の祖、デカルトは、「考えるわたし」という存在を想定した。この「わたし」に行きつくために、デカルトがとった方法的懐疑には、近代的な自己の思想がはっきりと表れている。ひとそれぞれの履歴、来歴を抹消してはじめて見いだされる良識を持った平等な自己という思想である。「自己の思想」が人種や家柄、身分に⁽¹⁾コウソクされない思考の主体という近代的な自我の概念とも深くかかわっていることは明らかだが、それでもなお、履歴を抹消された自己という人間像には、孤独な都会で生きるだれでもないだれか、だれでもないだれか、というイメージが⁽¹⁾つきまとう。

わたしは、「自己」を「デカルト的自己」、「履歴をもたない自己」の対極に位置づけている。自己とは、身体的存在としての履歴そのものにほかならない。身体的存在であるから、たとえばクローン人間をつくったとしても二人のわたしが存在することにはならない。同じ時間に同じ空間を共有することは不可能だからである。まったく同じ遺伝情報をもっているとしても、身体的に異なった空間に存在することで、別々の履歴をもつ二人の人間が発生する。人間が人間として存在することの意味をその履歴が示す。遺伝情報は簡単にコピーすることができるが、配置と履歴はコピーすることができないからである。

人間が身体的存在として、空間とともにある以上、空間とどのような関係をもつて生きるかということは、そのひとの人間形成と不可分な関係にある。これは環境が人間の精神に影響を与えるかどうかということよりもはるかに根源的な事態である。

人間の履歴が空間的な身体存在というあり方と不可分であるというとき、ここでいう空間は⁽²⁾を組み合わせる。空間のなかで生じた出来事は、その空間の履歴として⁽³⁾を組み合わせるからである。履歴をもつ空間のなかで、ひとは自分の履歴を積み、その履歴によって、ふたたび空間が履歴を重ねていく。人間の履歴と空間の履歴とを切り離すことはできない。

空間的身体存在としての人間は、空間と自己の身体とのかかわりを捉える能力をもつ。これをわたしは「感性」と理解した。感性が自己と世界との関係を捉えるとき、その捉え方の違いによって「するどい感性」となったり、「豊かな感性」となったりする。

空間と人間との関係を考える上で、大きな転機になったのが、高度成長時代以降の住宅理念や都市政策であろう。高度成長時代、大都市に人口が集中し、住宅確保のために、各地にニュータウンが造成された。大都市近郊の里山を切り開き、造成して、新しいコンセプトによって街がつくられた。そこには新しい家族の理念があった。

わたしが教えた学生のSさんは、一九七〇年代に、名古屋近郊のニュータウンで育った。このニュータウンには多くの同じ形をした家があり、同じ年齢の夫婦と同じ年齢の子どもたちが暮らしていた。どこを見ても同じような風景であった。遅くに帰宅する父親たちは、しばしば自分の家がどこだか分からなくなって、間違えて他人の家に入り込んだ。

Sさんは、そんな風景のなかで、「わたしはわたしでなくてもいいのではないか」という感覚に襲われたことがあったという。新しい家族のコンセプトによってつくられたニュータウンは、自分を取り替えのきく存在と感じさせ、その意味で個性をソウシ⁽⁴⁾ツさせる空間でもあった。

Sさんのことでは、その空間がSさんにとって一種の原風景であったという。「自分でなくてもいいのではないか」という自己意識の危機の記憶と結びついた風景である。

ニュータウンの風景は、それまで存在しつづけた里山空間を根こそぎにして造成された。それは、新しいコンセプトでつくられた空間、コンセプト空間であり、その風景は、新しいコンセプトでつくられたコンセプト風景である。子どもたちは風景を見ているように見えるが、じつはおとなたちのコンセプトを見ているのである。その与えられたコンセプトのなかで、そのコンセプトに適合するように身体を(5)する。子どもたちの遊びは、そのようにコンセプト空間に対応するコンセプト遊技である。そのようにして、身体までもがコンセプト化されていく。

だが、Sさんは、高校時代にニュータウンから雑然とした田市街に移り住んだ。そのときの違和感には、表現しがたいものがあったという。

新しい自宅の近くに古い神社の森があった。その暗く、湿った空間は、コンセプトを超えるものをもっていた。そこにはコンセプトによっては捉えられない風景の興行きがあった。風景が興行きをもつことを、わたしは「風景のひだ」と呼びたいと思う。

風景のひだの奥には、空間のもつ履歴が存在する。ひとの人生の長さを超える履歴がひそんでいる。その履歴をもつ空間のなかに自分の存在を得ることで、自己の存在は、時間的存在であることを確認し始める。Sさんは、その神社と人間の意味を問うために、参拝するひとびとの写真を撮りつづけたという。

空間と自己の発見こそ、あるいは、空間と自己のかかわりの発見こそ、自己の履歴の発見である。積み重ねられた履歴をたどって、履歴に組み込まれた体験を思い起こすとき、ひとは自分の存在を知る。自己を知る最初の体験とは、それまでの自己とは違う自己の発見である。その意識は、風景のなかに埋もれている自分を掘り出すことである。風景を見、風景に触れる自分を意識することである。この風景と自己の関係の把握という新しい事態こそ自己⁽⁶⁾へンヨウの起点であろう。わたしは自己⁽⁶⁾へンヨウの起点こそが原体験であり、そのときの風景を原風景ととらえたい。わたしがわたしであり始めた体験からけっして切り離すことのできない風景、それこそが原風景である。⁽⁷⁾

各世代のひとびとは、それ自体履歴をもつ空間でそれぞれの履歴を形成する。と同時に、その空間の履歴をも書き換えてゆく。里山であったところを造成してニュータウンをつくる世代は、それ以前の履歴を抹消して新たな履歴を刻む。その新たな履歴のもとで次の世代はかれらの履歴を形成する。だから、わたしたちがこどもたちに何を受け継いでもらうかは、かれらの履歴が形成される空間をわたしたちがどのようなものとしてかれらに手渡すか、という問題にキチヤクする。⁽⁸⁾空間の履歴に対して、それをどう書き換えるか、あるいは残すかということが空間のなかで行為する人間の課題である。

世代の継承とは、今述べたような意味で空間の履歴の継承である。空間の履歴の継承という観点からすると、今日見られる空間のコンセプト化は、空間の履歴を抹消してゆく方向で進められる危機的な事態である。古い歴史をもつ街道も新しい道路や街の造成のためになくなり、そのとき、空間に刻まれた履歴を語るものは亡びていく。

古くからの風景のなかで履歴を形成しても、概念化された風景のなかで履歴を形成しても、どちらも履歴の形成という点では異ならないのではないかと思えるかもしれない。しかし、わたしは、二つの履歴形成はその履歴の内容の点でまったく異なる点で考える。多くの虫や鳥の住む森の風景のなかで少年時代を過ごしたひとと、虫も鳥も知らないコンクリートの空間のなかで少年

時代を過ごしたひとでは、自然に対する感性が異なるに違いない。星を見たことのない都会の子どもたちが、高原で見る満天の星空を「空にじんましんができたようで気持ちが悪い」といったという話がある。空間での経験の違いが履歴の豊かさの違いである。

豊かな人生を可能にするような空間をわたしは豊かな空間と呼びたい。これまでモノの豊かさを求め、豊かな自然が失われようとする、失われる貴重なモノの価値、たとえば万博開催予定地に生息するオオタカの価値をめぐる議論が行われてきた。しかし、これでは、モノを中心に考えていることにはわりはない。また、モノの豊かさから心の豊かさへ、ということもいわれる。しかし、このような発想では、⁽⁹⁾履歴を貧しくする空間の概念化、貧困化に⁽⁹⁾対応することができない。「モノから心へ」ではなく、空間へ出て、自己の身体から環境全体を眺めることを提案したい。

では、豊かな空間とは何だろうか。一定の価値概念を空間に与えることで空間を再編することが、実は空間を豊かにする行為ではなく、空間の価値を限定すること、その意味で多様な価値を切り捨てること、つまり空間を貧困化することになるということとは、すでに述べた。わたしたちが空間を一定の目的のためにゾーニングするならば、そのほかの使用目的は制限される。それ自体が貧困化である。

わたしたちは、新しい価値概念の発見の場としてその空間に対するのでなければならぬ。「新しい」といったが、この「新しさ」には古い空間の履歴のもつ意味も含まれる。そのような価値概念の発見は、人間が配置された空間をどのようなものとして知覚するかということにかかっている。つまり風景の意味を読みとる能力が必要とされるのである。くり返すが、わたしはこの能力を「感性」と呼ぶ。

環境と自己の関係を捉える能力、配置と履歴から世界を感知する能力が感性であるとすれば、この能力は、人間が身体的空間存在であるという人間の本質に由来している。だからこそ、ひとりひとりの感性は異なっていて、あるひとびとの感性はするどく、また豊かであるといわれる。

だから豊か⁽¹⁰⁾な感性なくしては、豊かな人生というものはありえない。豊かな人生は、環境的世界との豊かなかかわりのなかで

はじめて実現するのであるから、配置と履歴のないことばによる世界の再編がそれだけで人間に幸福を約束するものでないことは、明らかである。

(桑子敏雄『感性の哲学』による)

注　ゾーニング……空間を人工的に区画化すること。

〔問一〕　傍線(1)(3)(4)(6)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕　空欄(2)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　時間　　　　B　概念　　　　C　感性　　　　D　身体　　　　E　行為

〔問三〕　空欄(5)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　調整　　　　B　鍛錬　　　　C　偽装　　　　D　確認　　　　E　再編

〔問四〕 傍線(7)「それこそが原風景である」とあるが、この「原風景」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 自分が、任意のだけれどもいいだれかにすぎない孤独な存在であることに気付かせてくれる風景。
- B 緑豊かな里山のように、日本人が自己の原点を知ろうとするとき、心よみがえってくる風景。
- C 神社の森のように、自然と人間との共生理念を想起させ、新たな自己に気付かせてくれる風景。
- D コンセプト空間ではなく、子供が自然に親しむ中で自己を知ることができるように作られた風景。
- E その空間に存在してきた事物や人々とのかわりを認識することで、自分を発見させてくれる風景。

〔問五〕 傍線(9)「履歴を貧しくする空間の概念化、貧困化」とはどういうことか。その具体的説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 里山が、造成による来歴の抹消により、特定の目的のためだけに利用されるようになること。
- B 高度成長期以降の都市政策によって、新たな道路が作られ、自然がコンセプト化されること。
- C 古い街道が消え、歴史が忘れられることで、自然との豊かなかわりが失われてしまうこと。
- D 万博を開催するために、オオタカの生息地が奪われて、自然の多様性が失われてしまうこと。
- E ニュータウンの住宅理念により、子供から感性の豊かさを奪うコンクリート空間が作られること。

〔問六〕 傍線⑩「豊かな感性なくしては、豊かな人生というものはありえない」とあるが、筆者の考える「豊かな感性」の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人の心を豊かにする新たな価値概念を風景のなかに発見し、それを利用していく能力。
- B 硬直したコンセプトの対極にあるもので、豊かな自然を意図的に守り続けていく能力。
- C 風景のひだの奥を読みとり、そこに新たな意味を発見することで空間を豊かにする能力。
- D 理性の根底にあるもので、風景の意味を感知し、理性的判断の材料として提供する能力。
- E 既存の空間に新たな価値概念を発見し、そこを公共の空間として保存し続けていく能力。

〔問七〕 次の文ア～エのうち、筆者の考えと合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア ある世代が恣意的に空間を利用することを阻むため、普遍的理念を語る言葉で環境保護を訴えていかなければならぬ。
- イ 自分たちなりのコンセプト空間を作ること、その中で育つ次の世代へ自分たちの理念を伝えていかなければならぬ。
- ウ 世代の継承とは、育まれてきた自然や文化を自分たちが更新した上で次世代に渡す行為であることを自覚しなくてはならない。
- エ 心の豊かさを実現するため、空間の歴史を表すものを抹消することなく、手を加えずに次の世代へ受け渡していかなければならない。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

言語学の概説書などを見ると、文字については大概無視されるか、書いてあってもほんの付けたり程度に過ぎない。ところが文字は言語記号としては現実的にも歴史的にも重要な役割を果たしている。第一、文字を使わなければ、言語の記述は不可能である。これは何も言語学だけに限ることではない。他のいかなる学問も文字なくしては成立しない。更に文字の何たるかを考えずに言語史の史料を扱って来たのは随分暢気な話である。このように重要な言語記号であるにもかかわらず、言語学の中で何故にかくも冷遇されているのであろうか。その答えは簡単である。言語学を生み、育てて来たヨーロッパにおいては、アルファベットを使っていて、そのアルファベットは原則として単音文字であり、一字が一音を表わすということで、文字を通していきなり音に取りかかることができると思っているからである。文字はいわば透明な眼鏡で、物が見えさえすれば眼鏡のことなど気にしないのである。したがって多くの場合、音論に附随して述べられる程度である。

翻ってわが国の状況を見ると、漢字あり、仮名あり、それも平仮名あり、片仮名あり、時にはローマ字まで使うというように、今時、この世界でこのように複雑な文字使用をしている所はどこにもない。しかも漢字の使い方は、音読したり訓読したりで、今になってこそ幾分整理されて来たとは言え、大学を出てもろくに漢字を使いこなせないというような、笑うに笑えない状態である。このような所では文字は透明な眼鏡どころではない。ことに漢字の場合、言葉はその背後に隠されてしまうことも稀ではない。そこで文字とは何であるかということを考えるには、逆説的ながら、日本こそ最も恵まれている土壌だと常々思っている。文字の研究、とりわけ文字の言語的機能を扱う文字論ともいべき領域が、当然言語学の中にあつてしかるべきであるが、現在のところ、いまだ十分に理論構成がなされていないため、その分野の研究は今後の発展に期待しなければならない。

文字も一つの言語記号である。それは音声に依る(3) 的な言語記号をその成立の基盤とするが、必ずしも単にそれを写し出すだけのものではない。言語記号として音声と文字はその性格を異にし、その使用を異にする。第一に、音声と文字とはその訴える感覚が違ふ。言うまでもなく音声は聴覚に、文字は視覚に依る。この感覚の相違は重大である。聴覚が一次的に進

行するに對し、視覚は二次元ないし三次元的に展開する。言語の根本的性格はその (4) 性、すなわち一次元的展開にあるが、これは言語が本来音声を利用するもので、したがって聴覚に訴えるものであるからである。この根本的性格は文字による言語も従わざるを得ない。文字言語は畢竟 ひつじょう 音声言語の上に成り立つもので、その逆ではないから。その意味で文字言語は (5) 的な言語である。この (4) 性という大きな枠の中ではしかし、音声と文字はそれぞれの特色を發揮する。音声は微細なニュアンスを含みながら連続して流れる。これに對し文字は区分 (discreteness) を要求する。その際、音声の微妙な移り行きに對し文字はこれを幾つかの部分に抽出し、それを単位として設定する。したがって文字は音声に通常極めて粗雑にしか対応しない。

音声言語が直接的伝達に役立つに對し、文字言語は主として間接的伝達の役にまわる。一般に社会の構造が単純な間は直接的伝達で事が済む。しかしその構造が複雑になって来ると直接的伝達だけではうまく意思が通じないことも起る。文字の發明と国家の起源とが密接に結びついているといわれるのはその為である。もつとも不思議なことにインカ帝国には文字がなかった。恐らく伝達の方式に何か特別なものがあつたのであろう。

文字が間接的伝達に役立つのは、文字という視覚記号が音声による聴覚記号に比べると恒久性があるからである。文字による記録は書かれた瞬間に消えるようなものではない。文字には書く用具が必要である。すなわち、筆やペン、それに付ける墨やインクのような書く道具と、紙や羊皮紙のような書かれる材料がある。そしてその書写材料は物によつて差違はあるが、場合によつては何千年も前の物が残るといふことも起つて来る。古代のことが曲りなりにもわれわれに分かるのは石や金属のような書写材料に刻まれた銘文が残されているからである。

文字が間接的伝達に役立つというその本来の使命は、恐らく最初は空間的な、いわば横の連絡のためのものであつたであろう。しかしそれはやがて縦の連絡、すなわち時間的距離を隔てての連絡にも役立つことになった。言い換えれば記録の保存ということに關係して来る。これは大きく言えば、歴史の成立に重要な貢獻をなすということである。事実、文字のない所には歴史はない。言うまでもなく、文字のなかつた時代にも音声言語に依る口頭伝承はいろいろの形で行われて来た。しかし口頭伝承だけで

は真の意味の歴史は成り立たない。人間の歴史は種々の記録の集積の上にはじめて可能になる。文字は言語記号としては確かに第二義的な存在であるけれども、第一義的な音声言語と比べてそれにも劣らない、否、それより遥かに大きな文化的意義を担っているものである。

このように音声と文字は伝達の(6)性と(7)性という社会的機能に顕著な相違を見せるが、言語の形成という点でもそれぞれ特有な展開を示す。音声に依る言語は性質上、(8)に依存する度合が大きい。対話の場面は話し手と聞き手の二人の人間を包む言語的場を構成する。言語的場は現実の(9)的場面ではなく、その場面に基づく二人の人間の間の(10)的な場面であって、そこにはまず二人の間の共感が根底に流れている。また話し手と聞き手に共通する知識・感情が背後にあつて、言語はそれらを結びつけつつ展開する。その際、音声は両者の関心を呼び起せばいいのであつて、話し手の表出は暗示的でこと足りる。したがつて話し手は必ずしも委曲を⁽¹¹⁾尽す必要はない。しばしば尻切れとんぼに終わっても伝達は成立する。それは言語的場におけるもろもろの言語外の要因が働いて聞き手の了解が得られるからである。はなはだしきは、(12)による無言の了解という場合もあり得る。音声言語は本来そうだったものである。かくして現実の音声言語はしばしば断片的であり、首尾一貫しない。これに対し、文字言語ではそうはいかない。もちろん、文字言語といえども言語である以上は、それ特有の言語的場の中で行われる。記録には一定の書式があり、手紙にも一定の形式が必要である。しかし音声言語を支えている現実の場面が欠けており、原則として書き手と読み手は同一場面に参与しない。したがつて文字言語にあってはある程度、音声言語の場合に言語外の要因が担っているものを言語化しなければならない。またある程度の筋道を通す必要があり、そこである程度の論理性を保たなければならなくなる。よつて音声言語のように断片的なまま場面や文脈に任せてしまふわけにはいかない。したがつて言語記号の果たす役割はずっと大きくなる。もちろん、音声言語でも講演とかラジオ、テレビの放送などは文字言語と同様な形成を必要とするが、これらはもともと文字による案文を音声に託したもので、文字言語の変形に過ぎない。

(河野六郎『文字論』による)

〔問一〕 傍線(1)「物が見えさえすれば」の「物」は何をたとえていつているのか。もっとも適当な二字の語を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問二〕 傍線(2)「日本こそ最も恵まれている土壌だ」と筆者が考えている理由は何か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 日本では漢字、仮名など多様な文字を使用しているので、文字の本質をさぐる上では極めてよい状況にあるから。

B 大卒者にとっても漢字を使いこなせないという現状は、漢字を通じて文字を考える上で格好の材料を提供しているから。

C 日本では漢字が使用される場合、一見明白な言葉の意味がかえってその背後にかくされてしまうことがよくあるから。

D アルファベットを使用するより、日本のように表意文字である漢字を使う方が、文字の言語的機能を考察しやすいから。

E 日本語の漢字には音読み、訓読みがあり、母語話者でさえその複雑さには戸惑い、文字について考えざるをえないから。

〔問三〕 空欄(3)～(10)に入れるのもっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返してはならない。

A 直接 B 第二義 C 第一義 D 空間 E 間接 F 場面

G 心理 H 線条

〔問四〕 傍線(1)「委曲を尽す」の意味としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 誠心誠意包み隠さず述べる
- B 詳しい事情を明らかにする
- C いろいろな場合を想定して話す
- D できる限り相手に理解を委ねる
- E はつきり分かりやすく述べる

〔問五〕 空欄(12)には「心」という漢字を使った四字熟語が入る。それは何か、答えなさい。

三 次の文章の筆者である後深草院二条は、幼いころより後深草院の寵愛を受けたが、やがて辞し、出家して諸国を行脚した。以下の文章を読んで、後の間に答えなさい。(30点)

観音堂はちとひき上がりて、それも木などはなき原の中におはしますに、まめやかに、草の原より出づる月影と思ひ出づれば、今宵は十五夜なりけり。⁽¹⁾雲の上の御遊びも思ひやらるるに、御形見の御衣は如法経の折、御布施に大菩薩に参らせて、今ここにありとはおぼえねども、鳳闕の雲の上忘れ奉らざれば、余香をば拝する志も、深きにかはらずぞおぼえし。⁽²⁾

草の原より出でし月影、更けゆくままに澄みのぼり、葉末に結ぶ白露は、玉かと思ゆる心地して、雲の上に見しもなかなか月ゆるの身の思ひ出は今宵なりけり

涙に浮かぶ心地して、

隈もなき月になりゆくながめにもなほ面影は忘れやはする

明けぬれば、さのみ野原に宿るべきならねば帰りぬ。

さても、隅田川原近きほどにやと思ふも、いと大きな橋の、清水・祇園の橋の体なるを渡るに、きたなげなき男二人逢ひたり。「このわたりに隅田川といふ川の侍るなるは、いづくぞ」と問へば、「これなむその川なり。その橋をば、すだの橋と申し侍る。昔は橋なくて、渡し船にて人を渡しけるも、煩はしくとて橋出でてきて侍る。隅田川などはやさしきことに申しおきけるにや。賤がことわざには、すだ川の橋とこそ申し侍る。」

この川の向へをば、昔は三芳野の里と申しけるが、賤が刈り乾す種と申すものに、実の入らぬところにて侍りけるを、時の国司、里の名を尋ねききて、ことわりなりけりとて、吉田の里と名を改められて後、稲うるはしく実も入り侍る。」など語れば、業平の中將、都鳥に言問ひけるも思ひ出でられて、鳥だに見えねば、

(8) 訪ね来し甲斐こそなけれ隅田川住みけむ鳥の跡だにもなし

〔「とはすがたり」による〕

注 鳳闕……宮中。 余香をば拝する志……大宰府に左遷された菅原道真が、かつて帝から賜った御衣を大事に手元に置き

続け、これを眺めて作った「恩賜の御衣は今此に在り、捧げ持ちて毎日余香を拝す」という漢詩の一節を踏まえた表現。

〔問一〕 傍線(1)「雲の上の御遊び」、(6)「やさしきことに申しおきけるにや」、(7)「ことわりなりけり」とはどういうことか。左

の各群の中からもっとも適当なものを選び、符号で答えなさい。

(1) 雲の上の御遊び

- A 宮中で催された管絃かんげんなどの催し
- B 雲の上に月が浮かんでいるさま
- C 宮中にお仕えをしていたころの恋愛
- D 月を眺めながらの今宵のそぞろ歩き

(6) やさしきことに申しおきけるにや

- A 誰でも知っていることを尋ねたのですね
- B 上品な響きの呼び名で呼んだのですね
- C 品格を備えた人はそう呼んだものです
- D 何と弱々しい名前と呼んだのでしょうか

(7) ことわりなりけり

- A 大変ひどいことである
- B お断りさせていただきたい
- C そうするのが私の役目である
- D そうなつて当然である

〔問二〕 傍線(2)「余香をば拝する志も、深きにかはらず」とはどのようなことか。もっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 作者は、院から賜った御衣も御布施として奉納するほど、仏教に帰依する気持ちか深いということ。
- B 院から賜った御衣がなくなった今でも、院の寵愛がいかに深かったかが思い出されるといふこと。
- C 院から賜った御衣が今は手元にないけれども、作者の院を忘れずにいる志の深さは道真と変らないということ。
- D 賜った御衣を御布施として奉納した今でも、院の仏教に帰依する志がいかに深かったかを思い出すのだということ。
- E 賜った御衣を手放した自分でも院のことを思い出すのだから、道真の帝への思いはさらに深かったはずだということ。

〔問三〕 傍線(3)(4)(5)の「なる」の説明として、それぞれもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 断定の助動詞
- B 推量の助動詞
- C 伝聞の助動詞
- D 動詞の連用形
- E 形容動詞の活用語尾

〔問四〕 傍線(8)の和歌は、在原業平が舟で隅田川を渡ろうとした時、水に遊ぶ都鳥を見て「都に残した人たちが健在かどうか教えてほしい」と尋ねた、という話を踏まえている。作者は「訪ね来し甲斐こそなけれ」と言っているが、何にがっかりしたのか。適當でないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 業平は舟で渡ったというのに、面倒だという理由だけで川に橋をかけてしまったこと。
- B 皆がすみだ川と呼んでいるわけではなかったこと。
- C 里の名前を国司の一存で三芳野ではなく吉田と変えてしまったこと。
- D 業平が見たという都鳥がいなかったこと。
- E 全てが昔と変わっていて、業平にちなんだ都のことを思うきっかけが全くなっていたこと。

〔問五〕 次の文ア、イ、オのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えな

さい。

ア 筆者は、今宵の満月よりもかつて宮中で見た月の方が素晴らしかったと思っている。

イ 筆者は、後深草院から賜った御衣を観音堂に奉納するつもりだったのに、忘れてきてしまった。

ウ 筆者は、観音堂に詣でた後、夜が明けるまで月を眺めてから宿に戻った。

エ かつて三芳野は、はじめてこの土地に来る国司でも知っているくらい、稲の実らぬ土地として有名だった。

オ すみだ川とすだ川は同じ川のこと、都の人はすみだ川と言うが、この土地の方言ではすだ川という。

